

大学におけるアカデミック・ライティング指導を 考える

〈座談会「アカデミック・ライティングにおける 引用指導について」報告〉

向井留実子・近藤 裕子・中村かおり

1. はじめに

大学におけるアカデミック・ライティングは、学生の思考力を育成する教育であり、入学前の高等学校とのつながり、そして、卒業後の社会とのつながりを踏まえて、長いスパンで捉える必要があるとされている（井下 2022）¹。一方、大学内でも、初年次、高年次、大学院という年次・課程があり、それぞれの段階で求められる文章のタイプや質は異なっている。そのため、大学においてはその段階に応じた指導が求められ、ライティングスキル育成の設計では、マクロ、ミクロの視点を要する。

筆者らは、アカデミック・ライティングの中でも特に引用に注目して、学生の使用実態を踏まえた指導方法という、いわばミクロに注目した研究を進めてきた。引用とは、自らの主張のために、どのような資料をどう扱うかという、文章作成の根幹に関わる操作であり、文章中の引用箇所だけの局所的な操作ではないことを踏まえると、引用指導もミクロだけでなく、マクロの視点から検討されるべきであろう。

そこで、筆者らは、大学におけるアカデミック・ライティング指導の実態や課題にはどのようなものがあるか、マクロの視点から得た知見

をもとに、ライティング指導の各段階で引用指導が機能していくためには、どのような課題があるか、ミクロの視点に立ち返って検討するため、ライティング指導を専門とする、実践者でもあり研究者でもある3名の先生方を招いて座談会を行った。座談会では、引用指導を話題の軸としつつも、ライティング指導全般についても発言を求め、マクロ、ミクロの手がかりを得ることを目指した。

なお、座談会では、引用とは、外からの情報を自らの文章の中に取り込む行為とし、引用が適切にできる能力を引用スキルとした。また、引用表現、引用の方法、出典の提示方法をすべて含めたものを引用形態とした。

以下の2では、座談会の概要、3では、座談会の中で取り上げられた話題を報告した上で、4では、そこから見えてきたライティング指導および引用指導に関わる重要な課題を示して、考察を行う。5では、まとめとして、今後の課題を述べる。

2. 座談会の概要

座談会は以下のような日時や場所、記録方法、招待者で開催された。

日時：2023年2月18日（土）10:00～12:30

会場：拓殖大学 文京キャンパス D館 203

記録方法：ICレコーダーで録音し、文字化

¹ 井下千以子編著（2022）『思考を鍛えるライティング教育 書く・読む・対話する・探究する力を育む』慶應義塾大学出版会

【招待者プロフィール】

二通信子氏

一般社団法人北海道日本語センター代表理事、
東京大学名誉教授

大学において、日本語非母語話者である留学生に寄り添いながら、アカデミック・ライティングの指導に20年以上携わる。レポート・論文指導の実践者であるだけでなく、そこで求められる引用指導のあり方への提言を多数行うなど、ライティングの中でもとりわけ引用に関する研究をリードしてきた研究者の一人。

〈主な著書・論文〉

共著 (2020) 『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

共著 (2015) 「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」『日本語教育』160, pp.94-109

佐藤広子氏

創価大学学士課程教育機構准教授

高等学校で国語教育に携わった経験を生かし、現在は創価大学で、日本語ライティングセンターの運営、並びに全学必修「学術文章作法」の授業のコーディネーターを務めている。高大接続のみならず、社会に出てからも役立つライティング力の向上に向けて、最新のICT技術も活用しながら、実践を通したさまざまな提言を行っている。

〈主な著書・論文〉

共著 (2012) 『日本語力をつける文章読本』東大出版会

単著 (2013) 「論理的思考力の発達と「問い合う活動」」『国語教育研究』48 (496), pp.22-27

大島弥生氏

立命館大学経済学部教授

留学生および日本人学生のアカデミック・ラ

イティング指導に携わり、大学におけるライティング指導の具体的な設計への提言を数多く行っている。書くプロセスへの意識づけを重視し、現在では一般的となったピア活動を池田玲子氏とともにレポート・ライティングの指導にいち早く取り入れるなど、ライティング指導の開拓者の一人。

〈主な著書・論文〉

共編 (2014) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第2版]: プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房

共著 (2013) 「学術論文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学270論文を対象に—」『日本語教育』, 154, pp.85-99. など

以上に、筆者ら3名を加えた6名で実施した。

3. 座談会で取り上げられた話題

座談会では、招待者の論考等には詳述されていない、背景の考え方やそこに至った事情などを知り、筆者らの研究の手がかりを得ることを目指した。そのため、引用指導を軸にしつつも、局所的な事項は最小限にして、ライティング指導全般について自由な意見交換の形を取った。招待者からは、さまざまな意見や知見が示されたが、以下では、紙幅の関係で、話題別に注目すべき発言部分のみを取り上げている。なお、各氏の発言のあとに1行空いている場合は、前の発言との連続性がないものである。

3.1 引用スキルのゴール

座談会は、「引用スキルのゴールは何か」という問いから開始した。招待者からは、その問いについての発言に加えて、引用スキル獲得のための指導方法も紹介された。

佐藤：創価大学では、レポートを、問いを立て

て客観的な根拠（先行研究・事例・データ等）をもとにその問いの答えとして得られた自分の主張を論理的に述べる文章と定義しています²。この「先行研究・事例・データ等」が、まさに引用の部分で、これがあることによって、自分の主張が相手に正確に、説得力をもって伝わるわけです。ですから、学生には、自分の意見をただ言うだけでは説得力が出てこない、「先行研究・事例・データ等」を適切に引用しましょうと、教えています。問いを立てて、その問いの答えを自分なりに考え、なぜそう考えたのかを説明するときに、引用を用いるということになるので、引用スキルのゴールというのは、相手を説得するために、より効果的な「先行研究・事例・データ等」を使うということと言えるでしょうか。

指導では、グループワークとしてピアレビューを取り入れています。まず、それぞれの文章について、主張に対しての妥当性のある根拠が引用できているかをグループで話し合いながら検証していきます。これを重ねていくと、みんなでやっていることが、だんだん個人に移っていくんですね。また、レポートは、Feedback Studio³を通して提出するようにしています。このツールによって既存の文献と類似している箇所が示され、一致度が数値で出てくるので、学生は引用が適切に行えているのか自分なりにまた考えて、書き直すことができます。それが、意外と引用理解の方法としては大きいかなと思います。

二通：引用スキルの前提として、基礎的なライティング導入段階では、まず、自分の書く文章

を大事だと思えるか、自分の書く文章は人に読まれたとき何かを与えて、自分も何かしら書いた実感が持てるか、とにかく自分の文章が信頼できることが必要だと思うんですね。その上で、それをもっとよくみんなにわかってもらう、説得力を持たせるために何を加えたらいいのかっていうところで資料が出てくると思うんです。以前担当した授業では、コピペに依存している留学生が何人かいたので、そういう人たちのことを考えて、引用を教える前に、まず、授業の中で、彼らの書いたものをなるべく評価するようにしていました。少しでもいいところがあればクラスで紹介して、そして自分で書いたものが価値があるっていうことを知らせるところから始めていました。引用部分を、かぎ括弧に入れて、自分の文につなげていくっていうのは実はすごく高度な日本語力が必要です。文全体が文法的に正しく作れているか、なかなか留学生は確認できないんですよね。引用部分に一生懸命で、つないだ部分が文法的におかしくなったりしますから、最初の段階でそれを正しく書くように求めると、もう引用は難しい、全部べたっと入れちゃった方が簡単ということになってしまうわけです。だったら必要な部分だけを抜き出すようにして、要らない部分を消してやらせればいいと思うかもしれないけれど、そう単純ではないんですよ。私自身が教え始めたころは、引用がちゃんとできないから、いろんな表現の仕方とか、引用表現とか、間接引用、直接引用とか、要約してみるとか、いろんなことを教えなきゃって思っていました。だけどやってるうちに、引用よりもっと基本的なところで、まず自分が言いたいことが表せない学生も多くて、最後の方は自分の言いたいことが書けた上での引用であるということを強調していました。

² 創価大学のライティング指導については、3.7で紹介している。

³ 盗用・剽窃になる可能性のある箇所を感知して、コメントや採点をすることのできるツール。

3.2 引用指導のあり方

引用指導や、引用形態の段階的な指導について具体的に述べられた発言を紹介する。いずれも、引用指導で考えておくべき、重要な点である。

二通：基礎的な段階で、直接引用と間接引用の違いを教えるっていうのは必要だと思います。その違いを見せるだけじゃなくて、実際に同じ文章で直接引用の文と、間接引用の文を両方つくってみて、どこが違うかを実感してもらうことが必要だと思います。私自身、英語圏の大学で、本格的な論文じゃなかったのですが、プロジェクト論文を書いたことがあって、やはり非母語話者が母語話者の書いた文章を要約するっていうのは、本当に難しいんですね。元の文章はネイティブが作った完璧なものなのに、それを非母語話者である自分が傷つけずに、内容をきちんと要約するのはものすごく怖いっていうか、難しいっていうことを実感したんですね。原文からなかなか離れられないんです。だから、べたに引用しちゃうんですね。それで、ワンクッション置くために、読んでよく理解して、クラスの中でも教師が質問したりして理解を確認した上で、キーワードだけをメモして、原文は見ないで、このキーワードからもう一回この内容はこういうことだったんだって再構成する。そこでやっとなら原文から離れられる。原文に引きずられちゃうから、それを見ながらじゃなかなかできないんですね。そうして初めて要約とか間接引用が可能になるのかなと思うんです。それを取り込んで文章をつくった上で、間違っていないかを最後に確認する。学生には、そういうプロセスを体験してもらうことが必要で、ただ、文面だけを見せて、これが直接引用、これが間接引用っていうのでは学習者には使えるようにならないと思うんですね。

あと、間接引用より直接引用のほうが難しい

と思います。大事なところをどこで切り取るかという点が。文全体を直接引用するんだったら簡単なんだけど、一部分を切り取る。いわゆる文献の学術論文なんかで、こまめに直接引用の部分を組み込みながら展開しているようなものは、その切り取り方や組み込み方が難しいと思うんです。

あと、引用した文のあとに、出典だけを示すようなものは、かなり上級で、お互いに研究者として分かっている人がやる場合にはいいけれども、学習者がやる場合は、出典は示していても、ただ、だーっと書き出してしまうことになってしまうから、基礎的な段階ではあんまり勧めないと思います。

大島：青い本⁴の引用のところで単文単位の例が細かく出ているので、それでずっと教えていたんですけど、やっぱり学生の使い方が合っていないくて、なんか変なんで、ディスコースの中で引用を学ぶ必要があると思って、p.79のような（ディスコース単位の作例による）説明をすることにしました。この文章なら、ディスコースの中で、データ提示、要約引用、直接引用の例で示されていて、どういうときに直接引用を使うか、どういうときに間接引用を使うかが、学生が理解しやすくなっています。その3つが主な引用なので、それが出てくるものを読ませた後に、じゃあ、どんなところで何を使っているか、2人で話し合わせたりします。そうすると、かっこいい言葉は直接引用しているとか、数字のところは直接引用していないとか言い合います。こんなレベルの知識のやりとりでも、彼らは初めてなので、口に出す活動が1回入ると理解が深まるんですね。ピアラーニングっ

⁴ 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2014) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第2版]』ひつじ書房

て、意見を述べ合うみたいに使われているんですけど、二通先生がおっしゃっていたこととすごく近くて、口に出すことがワンクッションになります。コピペだと体を通らないからワンクッションにならないんですね。普通、引用っていうと書くことみたいに思っちゃうんですけど、学んだことをしゃべらせる、シンク・ペア・シェア、がいいんですね。

二通：(基礎的段階では)資料を使うにあたっては、具体的なデータをそこに付けると、説得力が出たり、データを調べることによって自分の思い込みも変えたりできるので、誰かの論述を持ってくるような、そういう引用じゃなくて、事実とかデータとかを使うように指導していました。その段階では、引用の構文、引用の表現とか複雑なところには触れず、何々にはこう書いてあるなど、とにかく単純な形で出所さえ示せばいいという、すごく基本的なところを抑えるようにしたんですね。そして、だんだんそこにデータなり事実なり使えるようになったら、それに一言自分の感想とか解釈を加える。これはこういうことだと思つとか、これはこういうことを示している、それで自分はこういうふうに考えとか。引用したら、それに関して、解釈や評価を入れて、その後自分の意見を述べるという単純な組み立てができるところが、最初の段階のゴールかなと思うんですね。

大島：著作権の引用の要件に、自分の文のほう为主で引用のほうに従とか、いくつかあるので、学生には、授業でそれを何度も見せます。知的財産である巨人の肩の上に立つという話も出しながら、引用っていうのは、社会的な部分と、法律的な部分があって、社会人として守るようにと言うようにしています。あと、身を守るんだってことで、博士論文が全部、取り消し

になった小保方さんの話をいつもします。院生だったら、そこでもうあなたの研究者人生が終わるんだよとか言うと、みんな実感としてわかるようなので。

佐藤：あのとき小保方さんの上司の方が自殺なさいましたよね。学生にその話をするとうき刺さります。引用のルールを守らないことは、人の命を奪うぐらいのことだと理解できるようです。

3.3 初年次ライティング指導と専門の接続

初年次におけるライティング指導は、専門で学ぶ基礎となるべきものであるが、学生からは、初年次のライティング指導で学んだ内容と、専門で学ぶことに違いがあるという声もある。以下は、その実態と、その課題の解消に関する発言である。

佐藤：(「学術文章作成法Ⅰ」を受講した後に選択で取る)「学術文章作法Ⅱ」⁵をずっと担当しているんですけども、取る人が少なくて、受講している学生になぜこんなに取る人が少ないかとインタビューしたら、学部によって成績を取ることに直接結びつかないからって言うんですね。例えばこの間も、経営学部の学生に聞いたら、学部の授業と違うと言うのです。「学術文章作法Ⅰ」のほうではできるだけ信ぴょう性の高いものを持ってきなさいと、引用文献について指導しますが、経営学だと消費者が何を求めているか、売れるか売れないかというところに焦点が当たっているから、個人の体験みたいなものが必要になってきて、むしろブログからの引用なんかのほうに推奨されるって言うわけです。

面白かったのが、その学生が一生懸命のめり

⁵ 創価大学のライティング指導の詳細は3.7で紹介している。

込んでいる分野が、私は全然、理解ができなかったんですね。そこで、私に理解させるのに、あれやこれや持ってきて一生懸命私を説得しようとするんですよ。そういうふうに経営学部では相手を見て、何を引用するかを決めると学んだと言うのです。その学生は、1年生のときに習ったような政府の広報が一番信ぴょう性が高いとか、そんなの関係なくて、大切なのは相手に響くかどうかなんだって言っていました。

大島：(学生に論文中の引用、考察などの箇所を色分けさせると、その判断は)結構、分かります。どっちとも言えない文が出てくるんですよ。特に「である体」で終わる文とかが、実は外からの情報なのか、その先生の考察なのか。その分野の知識がないと分からないというのが絶対出てくるので、どっちも取れるところがあるよ、みたいな話をします。もしかすると、分野としてすごく新規性のあるステートメントかもしれないし、単なる一般論かもしれない。私たちは専門外だから分からないけれど、どっちを使えばいいかという表現の選択は、最終的には専門の先生と相談して決めて、と言います。特に修論生とか卒論生とかですね。われわれ日本語を教える先生は、学生に、この形が正しいですか、どうして分からないのみたいと言っちゃうんですけど、どっちにも分類できて、唯一の正しい答えはない。説明ができることが大事なんで、学生の答えも場合によっては違って良くて、その人がなぜそこを考察だと見なしたのかって説明してもらおう活動をすればいいんです。

佐藤先生のお話で言えば、例えば1年生だったら、引用はブログは絶対駄目というより、取りあえず駄目と言ったほうが、いいですよ。だけど、経営学の分野だったらもっと生の声で食ベログとか使ったりしている。そういうもの

は、絶対的ではなく、相対的で、そのディシプリンの学問的な手法とか志向にすごく依拠している。だから、絶対ということはないんですよ。それが大学生に必要なことなんです。高校生までは指導要領があるんで、これは絶対知つていたほうがいいよねということがあったかもしれない。理想的には、学生に、学問分野によって知の構築の方法そのものが違うんだっていうことを理解してもらって、それを分かるために1回卒論を書いていることを言えるといいと思います。でも、学生には伝わりづらいんですよ。

二通：確かにそうだと思います。引用したり解釈するって、人間がやっていることだから。その人にとってはここが引用、ここが解釈、ここが意見だろうけど。

大島：そうですね。書き手しか分からない部分がありますよね。ある専門の先生の意見を聞いたら、「僕らは表現で読んでいなくて、中身の情報が今論争になっているものかどうかということを読んでいるから、(表現の使用基準を)聞かれても分からない」と言われたので、今は、学生には、専門の先生方はそんなふうに文章を書いているんだということをメタ的に教えるのが、文章指導をしている自分の仕事と思っています。もちろんある程度基本的で汎用的な部分はあるとは思っていますけど。

大島：多分、初年次の指導を一生懸命やっている先生方がよく経験することとして、先生から教えてもらったことが2年生以上になると、役に立ちませんか、初年次で習ったことと卒論の先生の言うことが違いますとか言われる、みたいなことがあると思います。初年次の指導内容も、それ以降の内容も、根拠となる材料で構造を支えるという文章構造は通底しているのに、表面的な書き方の違いで違うって言われるわけですね。学生が違うと言うのはまだ理解で

きるんですけど、2年生の先生に言われたりするわけです。私の経験ですが、在職していた大学がほぼ実験レポートしか書かないところだったので、専門の先生方から、1年生の書いた実験レポートに動機が書いてあるのは変、とよく言われてました。そんなことがあったので、何年か前からライティングの授業の最後の日に、専門の先生に来てもらって、この授業で習ったことも、専門で書くレポートも、基本は同じ、違うのはここだみたいなことを言ってもらうこともやり始めました。

大島：ライティング指導に柔軟性が必要なことを日本語教師が知るべき段階に来ていると思います。今のように情報化が進んでいなかった時代は、こういう形を必ず使うと言っても、ある程度、通用したんでしょうけど、今は媒体もさまざまで、速報性があるものがいっぱいあります。そんな中では、例えば、役所の文章で要求されるものとか、何とか学分野の査読論文で要求されるものとか、一般的な言説として発表するときに要求されるものが、それぞれ異なるんだけど、どう異なるのかっていうのは結構千差万別です。だから、私が答えを知っていますよとは言えないですよ。初年次で、型式に入れて教えるってのは、その型式が絶対的だからじゃない。それが相対的にさまざまな形に振り分けられることを理解するために教えているってことですね。学生が人生の一つの発信のツールとして使うために、それまでに発表されたものをリスペクトしながら、わずかなオリジナリティーを言うんだっていう基礎を覚えること。それが大学に来て学ぶ学問だということの意味を知ってもらうことが大事。その上で、バリエーションはいろいろだっことを3年生、4年生、研究生とかで学ぶということになるかなと思います。でも日本語コースの全部の学生に、それを理解してねっていうのもちょっと酷

ですよ。

3.4 初年次ライティング指導とレポート課題の関係

ライティング指導は、誰に、どの段階で、どんな目的のための行うものかによって異なってくるため、それを特定して考えることは重要である。その、ひとつの手がかりが、大島氏から提示された。2023年2月15日に「第15回大阪大学専門日本語教育研究協議会」で大島氏が行った講演内容の紹介である。

大島：講演で紹介した図1で説明します。これは、成瀬先生⁶の①②③④の分類を論証の自由度と主張の自由度でまとめたものです。成瀬先生は、35人の大学教員に講義科目の課題のねらいについてインタビューをなさっていて、その事例を①②③④にあてはめて説明しています。まず、①の説明型は、何々について学んだことを書きなさいというものなので、内容の自由度も低いし、論証の自由度も低い、要するに、この型は別に問いを立てることはなくて、理解したかどうかですよ。レポートだけでなく、記述テストで出る場合もあるし、宿題で出てくる場合もあって、ノートを一生懸命取ってれば、それを書くだけでいいというものです。②の応用型というのは、これこれ学んだが、それを別の例で挙げなさいというようなもので、これは内容の自由度は高くなるけれども、学んだことを踏まえて書くだけなので、引用は要らない。③の意見型ってというのは、賛否を問うもので、日本留学試験の記述問題みたいな軽いものもあるけど、例えば、死刑制度につ

⁶ 成瀬尚志 (2022) 「レポート課題を分析する」 井下千以子編著『思考を鍛えるライティング教育—書く・読む・対話する・探究する力を育む』慶應義塾大学出版会, pp.155-172

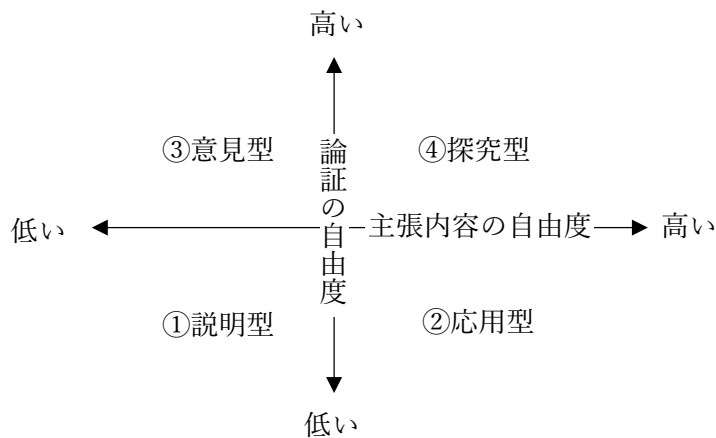


図1 レポート課題の4分類

成瀬 (2022) をもとに大島氏が作成した資料を一部改変して提示

いてあなたは学んできたが、この日本の状況において、死刑存続すべきかを書け、といった結構重いものもあります。④の探求型は、いろいろ学んできた中から新たな問題発掘をなささいといったもので、問いを立てることまで求めるから、プチ卒論みたいな感じになりますね。成瀬先生は、問いを立てない①②を学習レポートと呼んで、いわゆる論証型というのを、アカデミック・レポートと呼んだらどうかと提案しています。

多分この④のあたりでは、かなり引用って必要だけど、①②あたりは授業で学んだことが理解できているかどうかを確認するわけなので、そんなには要らないということになると思います。ですから、学生が、アカデミック・ライティングの授業で学んだことが他の科目で使えませんと言ったりするのは、そういう問いの質が違う、課されていることが違う、求められている課題が違う、といったことが原因なんじゃないかと思います。成瀬先生は、求められている課題によって、アウトプットが違うんだということを、学生も教員も把握しておく必要があるんじゃないかとおっしゃってます。だから、論証型の指導は、やる意味はあるだけ

ど、大学の普通の科目のレポートに生きているかっていうと、生きていないんじゃないかと思います。

二通：大島さん、説明型ですけど、説明するときに例えば定義をしたりとか、説明内容についてデータを示すとか、そういうところで基本的な引用のトレーニングっていうのはできないですか。

大島：やろうとすればできると思うんですけど、結局、先生としては、授業の中で言ったことを理解しているかどうかを、あなたの言葉で書きなさいだったら、引用は求めないし、例えば、入門書も紹介したから、出典もつけなさいっておっしゃる方がいるかもしれないけど、必然性は高くないですね。分かっているかどうかを知りたいというレポート、自分でも、よく出しますけれども、教えた概念にあたる事例を説明しなさいとあって、応用型になるかな。別にその概念が基礎的なものだったりすると、あえてそこに出典を書く必要はないということになるのかなって思います。

二通：そうですね。私たちはあえてそういう引用とか教えたいから盛り込むけど、専門の先生にとっては別にそれは必要じゃないということ

ですね。ライティングを教えたい日本語教師の視点と、専門の先生の側の一般的なレポートに求めるものは違うってことですかね。

大島：そうですね。成瀬先生は大学で圧倒的に多い講義科目で何がされているかっていうのが調査目的だったんで、演習はまた別だと思いません。

3.5 ライティングの学びが社会で役立つ場面

ライティング指導で学んだ知識が、その後の人生のどのような場面で役立つかについての発言が多くあった。以下では、その一部を紹介する。

佐藤：社会人に文章の書き方を教えていらっしゃる先生が、会社で報告書だとか書くときのスキルとして、パラグラフライティングが絶対必要だとおっしゃっていました。忙しい状況の中で、上司に全文を読んでもらうのは無理だから、最初のトピックセンテンスを読んで、その文が何を言っているか分かるように書かないといけないけれど、習っていないから書けない社会人があまりにも多いとか。学生には、そういう話もして、学術的な文章は結局、卒業後も社会生活を送る上でつながっていくということは強調しています。どうしても学術文章ということ、モチベーションが上がらない学生が多いので、授業では、ゲームを使って、自分たちの日常の話に落とし込んで、伝わらない体験などをさせています。人は人の話を聞きたいように聞くし、読みたいように読むんだから、自分の伝えたいことを、正確に理解してもらうためには、最初に全体像、あるいは結論を言ってから、総論－各論で言うと伝わりやすいということを言います。もちろん、相手の解釈に委ねる文学的な表現も大事にする必要があるんで、学生には、今、相手の解釈に委ねたいのか、自分の意見を正確に伝えたいのか、その自分の意図

によって表現を変えられる力をつけようと言っています。

二通：私は3年前に一般社団法人をつくって、いろんなことをアピールしなきゃならない立場になりました。常に道や市の助成金に応募をしながら、それを獲得して活動していくってことをやっている、本当に市民として活動するための日本語力、文章表現力が必要だなってすごく感じるんですね。どこかの既成の文章を持ってきて、それで書類を作ってしまうと、新しいものをやろうと考える過程が全然なくて、学生のコピペと同じく、書類を表面的に作るようになります。だから、共同運営者とはいつも、まず問題を出し合おうというところから始めています。レポート作成と同じです。そのプロセスを日本語教師も体験する必要がありますね。それがないと、その次のいいものができないんですよ。今は、既成のもので書類さえ整えればいいのでは通用しなくなっていますよね。日本語教師もそうだけど、社会的に市民として何かやっていくために、すごく文章表現力も必要ですよ。これは引用につながることでしょけれども、安易に外から持ってこないで、まずは考えてみて、従来のものを取捨選択したら、それに典を示すとか、そういうところを今、日本語教師の人が実際に経験することは大事ですよ。だから、人生のそのときそのときに必要なライティング能力があって、その基礎になるのが、こういうアカデミック・ライティングなんじゃないかなと思っているんですよ。私も自分のライティングの教科書の改訂版をつくるとき、あらためて見直してみて、これ、全部、日本語の先生たちと一緒に、もう一回やりたいなと思ったぐらいなんです。それを今の若い学生たちにどう伝えたらいいのかが課題ですけどね。

大島：看護師さんでも保育士さんでも介護士さ

んでも、引き継ぎの文章とか、文章をいろいろ作りますよね。看護記録が間違っていたりすると裁判になるらしいです。法律系のパラリーガルみたいな仕事でも、絶対文章力が要るし、あと、地方公務員とか、警察官、消防士になるのにも、小論文が大きいですよ。理系だと半分以上は大学院に行きますから、そういう層が大学に職を得たとき、ディプロマ・ポリシーや、その市民性とか、論理的思考力っていうものを表すときは、ふだんの論文とは違うタイプの文章を書くことになります。エントリーシートとか面接とかでも、ちゃんと根拠を持って言えるっていうことは結果に結びつくので、ライティング能力は、将来必ず役に立つと思います。

3.6 ライティング指導の課題

ライティング指導を有効にするための課題として、学生が教員以外の人から学べる環境づくりがまだ未整備で、初年次の指導が、その後の学習につながっていないこと、学生が引用に対して意識を向けていなかったことが指摘されていた。

大島：ライティングスキルの向上のために、先輩や周りの人ってすごく重要ななと思っています。ライティングスキルが伸びた学生に聞くと、先輩に聞きに行ったとか、図書館の司書さんに聞いたとか、ポスドクの方とか研究室にいたりする人に張り付いて習ったとか言います。レベルの高い学生はそういうことができるのですが、それをもうちょっと普通の学生にも、それができるように学べる環境を体系化することが必要かと。以前、理系の学生からは、アカデミック・ライティングは要らないと思われていたので、ライティングの授業に、理系の先生に来ていただいたんです。その先生がたぶん何かの外部資金だと思いますが、その審査に落ちた

悔しさをものすごい調子で語って、研究費を取るためには説得力のある文章が絶対必要だと訴えていたのを聞いて、学生たちには響いたみたいでした。そんな先生の肉声が、学生の気持ちを動かすんですけど、日本語教師みたいな言語の先生は、形式とか、指導のステップ化が上手なので、そんな肉声を消しちゃうんですよ。それはすごい自分でも反省するところです。

佐藤：初年次で教えていたとき、こんなにちゃんとできていたのにという学生が、2、3年で求められるレポートのタイプが違うために、4年生になったとき学んだことを忘れてることもあります。初年次で学術文章作法を学んでも、2年生、3年生、全然書かないで済んでしまうという学部も多くて。

大島：ある学生が、初年次のとき、必修のライティングの授業で引用を習ったはずなのに、3年生ぐらいになって習ったことがないと言っていたんですよ。15回の授業のうち、12回ぐらいは引用について話していたはずなのに。

二通：大学に在職していたときに、各先生の研究についてみんなで聞く会があって、私はライティングの指導について話しました。その後、立ち話で、ある専門の先生からレポートの評価の仕方について何って、すごく苦勞されているっていうことがわかりました。そのとき、ライティング指導をまだまだ改善する余地があるなって思ったことがあります。あと、高校でも今度、引用が入るっていうことなんですけど、文章を批判的に読むとか、書かれてあるものから自分が取捨選択するとか、ということも併せてやらないといけないんじゃないかなと感じています。

3.7 組織的なライティング指導の運営方法と

効果

創価大学では、ライティング指導を行うシステムが組織的に整備されている。佐藤氏からは、このシステムの運営方法と効果についての発言が多くあった。

例えば、創価大学では、全学の初年次必修科目として「学術文章作法Ⅰ」という授業があり、ここでは『レポート作成の手引き』⁷がテキストとして用いられている。また、学生は、授業とは別に、ライティングセンターに行くと、チューターからも助言がもらえるシステムになっており、そこでも『レポート作成の手引き』が用いられている。この手引きの編集は、教員とチューターが共同で行っていて、皆が気づいたことを記録し、毎年それを反映させる形で、改訂が重ねられている。

佐藤：「学術文章作法Ⅰ」には、担当者が10人いて、共通シラバスに従い、同じ目標を目指して足並み揃えつつ、やり方はそれぞれの良いところを生かしながら授業をしています。評価にずれが出ないように、モデルレポートを各自が採点した後、丁寧に観点をすり合わせるなど、打ち合わせも週1回ペースで密に行っています。

佐藤：授業を担当している教員全員でライティングセンターも運営しています。正課（授業）と正課外（ライティングセンター）を連動させているので、ライティングセンターには、よくできる学生が、授業で自分はこれじゃ駄目だから、もっと良くなりたいたいと思って来ることもあれば、あまりできない学生が、何も分からなくて白紙の状態でも来ることがあります。そうすると個別にチューターや（正課のクラスとは）別

のクラスの教員が対応することになっています。

佐藤：日々、ライティングセンターで学生の相談を受けているチューターと授業担当教員が、もっとここはこういうふうに書いてあげたほうが学生たちが分かりやすいとか、そういう意見を必ず年度の終わりに、『レポート作成の手引き』に付箋で付け合せて、それを元に次年度の改訂をする共同編集をずっと続けています。その過程を通じて、全員が何回もこれを読みます。学生にも何回も読ませますけども、チューターたちや教員も何回も読むことになるので、指導のずれがなくなってきました。チューターたちの学部は多様で、教員も専門が違いますので、それぞれの専門で生かせるものは何なのか、その汎用的なスキルとは何なのかということも、みんなで出し合いながら考えています。この共同編集は毎年続けていて、文献検索の部分はレファレンス担当職員も入っています。

佐藤：2021年度は『レポート作成の手引き』を電子化して、PDFで提供しました。ところがPDFにしたら全然、定着率が良くなって、それで1年でやめました。2022年度からまた紙の冊子に戻したんです。PDF版のときもわざわざ自分でプリントアウトしていた学生も多くいて、2年次以降も卒業するまで見てもらうことを考えると、やっぱり紙がいいんですよ。

佐藤：結構図書館に行くことも推奨していて、最初のテーマ決めのところから行くんですけども、新書の棚から出発して、テーマが決まってきたら、専門の分類番号のところに行きます。そうすると背表紙を見るだけでもどんな観点があるかっていうのも、わかります。そこで、問いを修正したりとか、そこからまた論文のほうの検索に行ったりとか、進む子はちゃん

⁷ レポート作成の手引き 2022年度版編集委員会 (2022)『レポート作成の手引き』創価大学学士課程教育機構

とそうやって進んでいきます。それが理想的な進み方かなと思います。

4. 座談会から見えてきたこと

引用指導を軸に、大学におけるライティングについて、二通氏、佐藤氏、大島氏から話を伺った。その中で、マクロ、ミクロのさまざまな課題が示されたが、以下では、その中から特筆すべき重要な課題を3つ取り上げ、それに対する考察を述べる。

(1) 初年次のライティング指導と専門で求められるライティングスキルとの関係

初年次に学んだライティング知識が専門での文章作成に生かされないという問題があった。その一例として、ある分野では、一般的に信ぴょう性のある資料より、個人の感想といった情報のほうが重要とされるケースもあることが挙げられていた。資料がどのようなものであれ、いかに読み手を説得させるか、という点で共通するが、それが初年次段階では見えにくいということであろう。その解決方法として、初年次ライティング指導の際に、学生には、どの専門にも通じる汎用性のある基礎知識としてのライティング指導を行っていること、そのバリエーションとして専門での文章作成があることを理解させる必要があることが指摘されていた。

しかし、そもそも、汎用性のある基礎知識とはどのようなものか、現在行っている指導内容は汎用性のある知識になっているのか、という疑問が残る。もし汎用性のある基礎知識であるとしても、それがバリエーションにどのようにつながるのか、また、それを学生にどのように理解させるのかを考える必要がある。大島氏が実践しているように、ライティングの授業の最後に専門の先生に参加してもらって、違いを紹

介するという方法もあるだろう。ただ、それは専門が同じ学生がいる場合で、学生の専門がさまざまな授業の場合にどうするかという問題も生じるだろう。

(2) 初年次のライティング指導と大学の講義科目で求められるレポートの型との関係

大島氏から、大学の講義科目で求められるレポートの型の傾向(成瀬 2022)が紹介された。レポートは、①説明型、②応用型、③意見型、④探究型という4つの型に分けられ、これまでのライティング指導は、③や④に近い、論証型の文章が中心であったが、実際の講義科目で求められているものは①②が多いという指摘であった。講義科目で求められるレポートが、他者に意見を主張することを目指すのではなく、講義科目の内容理解を教員に示す①②の型であるとしたら、それに合った内容を過不足なく書くスキルが必要になる。①②の書き方が、現在初年次で中心的に指導されている論証型レポートの書き方に含まれるのか、あるいは、別の書き方なのか、その点を明確にしていく必要もあるだろう。

(3) 引用指導の段階性とライティング指導とのつながり

引用指導については、二通氏から、留学生の場合の指導の段階性についての発言があった。引用する資料について、初学者には、論述を引用するのは高度であるため、事実やデータの引用から始めることが推奨されていた。また、引用形態について、直接引用は、元の文章の切り取り方、自分の文章の中への組み込み方がわからないため難しいこと、間接引用は、母語話者の文章を非母語話者が言い換えることはハードルが高いことが指摘されていた。指導の手順を考える際には、このような視点を取り入れていく必要があるだろう。しかし、(1)(2)の事情



を考えたとき、それはどの時点で、どのように取り入れるべきなのか。

大島氏の発言では、講義科目で求められるレポートのうち、①説明型、②応用型では引用の必要性がない場合が多いことが指摘されていた。③意見型、④探究型は、論証型に近く、この段階になって引用の重要性が出てくるということになるが、では、ライティング指導のどの時点で、資料を用いる引用指導を取り上げたらいいのか。成瀬氏の調査では、演習科目は対象

となっていなかったが、それらを含めたとしても、同じ疑問が生じるのではないだろうか。

5. まとめ

座談会では、初年次のライティング指導について、社会との接続に関わるマクロの視点の発言から、引用の具体的な指導方法やライティング指導の活動に至るミクロの視点の発言まであり、さまざまなレベルでの課題が示された。筆

者らにとっては、大学の教育課程全体の中でのライティング指導のあり方、そして、その中での引用指導のあり方を考える貴重な機会となった。いくつかの発言で指摘されているように、現状では、初年次ライティングで得た知識が2年次以降に生かされておらず、3.6の大島氏の発言にあるように、引用についても、十分に教えていても、引用と認知されていないという問題もあるように思われる。井下(2013:16-17)⁸が「(思考を育むカリキュラムデザインには)教員個人レベルの指導だけでは効果が少なく、教員団で検討していくカリキュラムデザインが必要とされている」と述べているように、組織的に設計されたライティング指導の中でな

いと、ライティングスキルの育成、そして、引用への意識化も実現しにくいということなのだろう。4で示した、専門分野で求められているライティングスキルや、講義科目で求められているレポートの型に合った書き方と、初年次で行われるライティング指導を結びつけていくことも、やはり個人レベルでは困難なことも多い。創価大学のようなライティング指導に組織的に取り組んでいる事例を参考にしながら、初年次ライティングの教員が身近な教員を巻き込みつつ、ライティング指導、そして引用指導のあり方を考えていくことも必要となってくるだろう。筆者らの今後の課題として、組織レベルで考える必要があること、個人レベルでもできることを整理しながら、大学におけるアカデミック・ライティングの引用指導のあり方を考えていきたい。

⁸ 井下千以子(2013)「思考し表現する力を育む 学士課程カリキュラムの構築—Writing Across the Curriculumを目指して」関西地区FD連絡協議会 京都大学高等教育研究開発推進センター編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房, pp.10-32

追記：本研究はJSPS 科研費 JP19K00731 の助成を受けたものです。